

禅籍翻訳上の諸問題

緒方宗博

I 心 字

禅籍を英独仏等の諸外国語に翻訳するという事が果して成功する事であるか否か、従つてそれは善い事であるのか、それとも悪い事であるのか、それ自体が一個の問題である。然し無門関を始め二三の禅籍が既に内外人の手に依つて訳出されている以上、今日、我々はその善し悪しを論じているよりも、如何にして誤解の少ない訳本を世に送るかという事が関心でなくてはならない。

禅籍翻訳上困難な問題の一つに心の一字がある。これは普通には mind と Heart かとか spirit と訳される字であるが、どの訳も一字で禅に言ふ心字の意義を写すには充分ではない。例えば柴西禅師が、興禅護国論に言う『大いなる哉心や、天の高き極むべからず。而るに心は天の上に出ず。地の厚き測るべからず。而るに心は地

の下に出ず。日月の光は踰ゆべからず。而るに心は日月光明の表に出ず。大千沙界は窮むべからず、而るに心は大千沙界の外に出ず。それ太虚か、それ元気か、心は則ち太虚を包んで元気を孕むものなり。天地は我を待つて覆載し、日月我を待つて運行し、四時我を待つて變化し、万物我を待つて發生す。大いなる哉心や、我已むことを得ずして強いて之を名くるに最上乘と名け、亦第一義と名け、亦般若実相と名け、亦一真如法界と名け、亦無上菩提と名け、亦楞嚴三昧と名け、亦正法眼蔵と名け、亦涅槃妙心と名く』という心字の如きは何と訳すべきであろうか？

若し既成の諸国語が禅録の凡ての文字言句を翻訳するのに間に合うものであれば翻訳の事業は比較的簡単である。何故なれば各種の字引を揃えれば事足る訳であるからである。然し、主として論理的な、従つて二元論的な

西洋思想の語彙だけでは禪の無の思想は写し尽せないとなれば、何か適当な新しい言葉を作り出すより外ないであろう。而してこの事たるや決して容易な事業ではない。

斯界の世界的権威鈴木大拙博士は禪の無心思想を説明するのに『宇宙的無意識』(cosmicunconscious)という新造語を使って居られるが、果してこの言葉がどういう風に西欧読の者に理解されて居るか、博士自身も疑問にして居られる。

II 史実と伝説

無門関の第六則には世尊拈華の話が載って居り、同書の第二十二則には迦葉刹竿、同三十二則には外道問仏、同四十二則には女子出定の物語りが出て居る。又碧巖集の第一則には達磨と武帝との問答の話が載って居る。これらは史実として取扱うには種々な難点がある。然し又単なる伝説としてしまふにはあまりにも事重大である。如何に処理すればよいのか？

III 時代感覚のずれ

無門関の第三則には俱胝豎指の話があり、景德伝灯録第三卷には二祖断臂の話があり、これらは何れも現代西欧の感覚から言つて、教育方法としては残忍過ぎるもの

である。恐らく西洋人は南泉斬猫の話でも、睦州が雲門の足を砕いたという話でも聞く事を好まない事であろう。これらを如何に伝うべきであろうか？

IV 精神治療法

最近の欧米の科学者、就中精神分析学者、医学者の間で、禪を研究する者が増え、種々なる出版も現われ、中には新造語を紹介して居るものもある。例えば、PSYCHHEDELIC などという言葉は如何に邦訳せらるべきであらうか？

これは単に訳語上の問題ではないが、LSDその他の薬物を使って、禪の魔境ともいふべき精神状態を誘致して、禪の悟りと混同しようとして居るが如きはどんなものであろうか、一考を煩わされるものである。